

## 理事長告辞

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。

また、ご両親、ご家族の皆様にも心よりお喜び申し上げます。

先程、新入生の皆さんがお一人おひとり壇上で本学の歴史を創っていく第1期生としての誇りを胸に、金田一学長と握手される様子を拝見するのは、実に感慨深く、嬉しい瞬間ではありました。しかし、同時に責任の重さを改めて感じた瞬間でもありました。

それは、産業界一筋にキャリアを過ごしてきた私であるからこそ強く感じたことなのかも知れません。

現在、私達を取り巻く世界の環境は急激に変化しています。皆さんもインターネットは素より、人工知能やロボットなどの科学技術の進歩により、毎日の生活が劇的に変化しつつあることは感じておられると思います。10年後には、現在の仕事の49パーセントは無くなってしまおうと言われています。勿論、新しい仕事が生み出されるのは事実ですが、そのような世界で必要とされるのはどんな人材なのでしょうか？

世界では、今先進国の中で熾烈な人材獲得競争が行われています。それは人材こそが社会が必要とする新しい価値を生み出すことができるからです。その新しい価値こそが「イノベーション」と呼ばれるのです。

そのような環境の中で、大学の役割もまた大きく変わろうとしています。

長野県立大学は、正にそのような新しい時代の要請に応えるべく誕生した大学なのです。

金田一学長の言われたように、本学の明確な目的は「グローバルな視野を身につけ、長野に軸足を置きながら新たな時代に活躍するリーダーやプロフェッショナルを輩出する。」ということです。学部を問わず全員が参画する海外研修プログラムや、一年次全寮制度、そしてソーシャル・イノベーション創出センターなどの本学の特長ある制度やシステムは、全てこの目的を真剣に、そして、確実に実現するために創られたものなのです。

皆さんは、「象山寮」と呼ばれている、後町キャンパスの名前が、信州松代藩の生んだ幕末の天才思想家であり兵学家であった佐久間象山（ぞうざん）に由来していることはご存知だと思います。吉田松陰や河井継之助等の師であり、勝海舟や坂本龍馬などにも大きな影響を与えた佐久間象山が、現代語にして簡単にいえば、「20代で藩全体のことを考え、30歳を過ぎて日本の問題を考えるようになり、40歳以降では全世界のことを考えるようになった」と言っています。

その象山ですら、真の意味で世界への視野が開かれたのは1853年浦賀に来航したペリーの黒船を目にした時からと言われていています。現実の経験無しには、視野は広がらなかったのかも知れないのです。象山は終生日本を離れることはありませんでしたが、それ以降常に世界から日本を考えるとという姿勢を貫き通した最初の日本人だったのです。

翻って、皆さんには、あの松代の地に生を受けた佐久間象山が経験した制約は全くありません。皆さんには、先ずは高い志を持って、大きな夢を描いていただきたい。そして、本学の恵まれた環境を活かし、その自らの夢の実現に思いきってチャレンジをしていただきたい。そのような皆さんに、私たちは全学を挙げて、惜しみ無くサポートをしていくつもりなのです。

最後になってしまいました。この大学の実現は今日のご来賓として祝辞を頂くご3人の方のご支援なしには考えられませんでした。

阿部知事の本学実現のために掲げられたビジョンと実現に向けての熱い情熱とが、理想の大学造りを追求する私たちに大きな励ましとなりました。敢えて申し上げれば、阿部知事が「象山寮の名づけ親」であることにも、深く感謝しているところであります。

また、加藤市長の変わらぬサポートこそが、長野市全体を本学のキャンパスにしたいという私たちの理想を実現に導いて頂いた最大の要因でした。そしてまた、本学が県立大学である以上、鈴木議長様の県議会の変わらぬご支援は、当然ながら不可欠の要素でございました。

本学を代表して、ご来賓の皆様にご心より感謝を申し上げて私の告辞とさせていただきます。

平成30年4月8日

公立大学法人長野県立大学 理事長 安藤 国威